万年筆

土塀　友

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

万年筆

【Ｎコード】

Ｎ０３３７Ｑ

【作者名】

土塀　友

【あらすじ】

「最近思うこと」というテーマ。

高級万年筆にあこがれる。

正月二日目、私は通信講座の付録に付いていた万年筆を使っている。昨年の暮、インクカートリッジを購入しようと思い、文具店に万年筆を持参した時のことである。万年筆に合ったカートリッジを特定するためか、店長が丹念に私の万年筆を調べ回したので、私は「安物の万年筆だから」と、恥ずかしくなった。

万年筆に憧れる思いは子供のころからあった。昔の万年筆は本体の中にゴム風船のようなものが付いていて、インクを吸い上げて使っていた。インク壺をひっくり返して、机の上を真っ黒にした経験が一度だけある。あの時は心臓が止まる思いであった。覚悟したが、母はそれほど叱らなかった。カートリッジになった時は「便利になった」と思ったが、社会人になってからはボールペンを使った。

以前、和服姿の作家が太い万年筆を握り、原稿用紙に向っている写真を見たことがある。作家が誰で作品が何かは記憶にないが、あのド太い万年筆だけは私の脳裏に焼き付いて離れない。あの写真が強烈に私の記憶に残っているのは、恐らく、作家の創作への情熱が迸(ほとばし)っていたからであろう。その象徴があのド太い万年筆であったのではないだろうか。「あの万年筆は魂を宿している」。私はそう思った。

生活が精一杯の私には、贅沢品と呼べる物が一つも無い。かといって「欲しくは無い」と言えば、ウソになる。もし、望みが叶うならば高級万年筆が欲しい。人前でさり気なく万年筆を取り出して、サラサラと文字を書く。自慢せず、卑下することも驕(おご)ることも無く、ただ自然に振舞う。

高価な万年筆であっても、その気になれば手に入れることは可能であろう。しかしそれは、多分に見栄を張るだけの道具に過ぎず、あの写真のド太い万年筆のように、知的な雰囲気(ムード)を醸し出せるかどうかは疑問である。つらつらと考えるに、どうも私には今の万年筆

を大切に使い、この万年筆が「長いこと使ってくれてありがとう。これからは高級な万年筆を使ってください」というまで修行した方がよさそうだ。万年筆は単なる文具か、それとも象徴足り得るのだろうか。私はこの万年筆（ペン）で夢を描く。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0337q/

万年筆

2011年1月9日10時13分発行